

北海道における有料老人ホームの実態 (その1)

正会員 板 東 諭*

本稿は「北海道における有料老人ホームの実態調査」の結果にもとづき、入居者の過去における社会的、個人的生活環境、また、現在の生活内容および将来の施設利用意識などについて、一連の検討を試みたものである。

調査概要一調査は、函館厚生年金老人ホーム(定員50名)、小樽簡易保険加入者ホーム(長期定員18名)、岩見沢市立経費老人ホーム(定員75名)、の3施設での入居者を対象とするアンケート調査に重点をおき、同時に現地観察記録なども行なった。調査期間は、40年2月上旬より同年5月上旬に至る間で、入居者92名(夫婦者を含む)より回答を得た。

1. 入居者の生活 入居者の過去の生活がどのような職業や住まいをもち、この種施設の入居事情はどうであったかは次の通りである。まず職業であるが、最も長かった職業と最終の職業とは一致している場合が多く、比較的安定した職業内容になっている。職別人員をみると男性では商業が最も多く、次いで農業、官公庁勤人となっている。女性では有職者が少なく大半が無職になっているが、夫の職業は商業であったなどが割合に多い。職業の地位は商業や農業では殆どが自営者で、官公庁やその他の勤人の場合は役職者が多い。入居前の居住地については3施設とも殆どが道内の都市居住者で、函館厚生年金老人ホームでは過半数が地元者で占められている。しかし、小樽、岩見沢の両ホームにおいては逆に地元以外の近隣都市(札幌市)からの入居者が多い。入居前の住宅は、自家であった—45民間借家または貸間—15、公、社宅—10、公営公団住宅—4、その他—7、不明—11、で持家者は約半数であった。また、これらの住宅での住まわれ方をみると、子供と同居—43、自分達だけの暮らし—21、親戚知人の家—7、その他—5、不明—16、で子供と同居していた生活が多い。この種施設に入居された理由としては、老人だけの生活を望んだ—20、一度入ってみたかった—16、子供達のすすめで—7、住むところがなかった—6、その他—24、不明—19、で自発的意志のもとに入居された状態が多い。しかし、実際にはこれらの理由の背景に、種々の家庭事情が関連して入居されている場合が多い。

以上の諸点について、職業—住まい—家族、などの関連をみると、商業または農業—自家—子供と同居、と結ばれる形態が最も多く、この場合には事業面や住宅は子供に任せて入居しているのが一般であった。

2. 入居後の生活 単身入居と夫婦入居の比較では単身者の割合が多く、しかもその内の過半数が女性である。平均年齢は総体で70才(男—76.2、女—69.8)で健康者を対象とする入居方法がとられているため、弱体者の数は少くない。一般的に入居者は気ままな生活が営まれ、交際の範囲も気のあう同志に限っている人が多い。入居後の施設に対する感想では「気楽でよいまたは老人同志の生活で楽しい」などの回答が多く、家庭的な環境に帰りたいと希望している人は少い。次に入居生活に最も重要な入居費(各施設とも月払い制)、生活費などの主たる財源では、財産や貯金、または子供達よりの援助、となっている場合が多く、恩給、退職金などによっている人は比較的少くない。この傾向は職業内容によるもので、既述の通り企業の経営者や女性の無職者などの比率が高い理由による。また将来における経済的な不安感については、「あまり心配はしていない」との回答が多かった。しかし、入居費が高くなっても居住性の向上を望むかの問には「現状でよい」が圧倒的に多い。さらに施設利用の展望においては、過半数が「死ぬまで居住したい」と述べている。この点を夫婦者のみについて、どちらが欠けても入居を続けるかについて双方の意志をみると、やはり単身になっても入居を続けるが多い。したがって、現入居者においては、この施設こそ自分達の最後の安住場所であるという意志のもとに、日々の生活を営まれている。

3. 考察 有料老人ホームでは無料施設と異り、入居者の生活内容には大きな個人差がみられる。とくに上記施設の場合では女性の入居者が多く、一般的に経済力と余暇をもつ老人の集団生活であるため、入居者相互間の交際過剰による人間関係の問題がかなり生じている。同時に、過去の生活との交流や都市との接触などを強く求めている人が多い。したがって、この種の施設計画にあたっては、入居者個々の生活圏の保全はもとより、都市との関係を考慮した設定、周囲の社会的環境などについて充分検討を加えなければならない。

おな、上記の点は調査の前提部分であって、建築的考察は第2報で述べる予定である。また調査結果については3施設での傾向であることをおことわりする。

** 単身者の入居費は11,500円(暖房料別)以下となっている。

* 北海道立寒地建築研究所員